

紐づけ不良

関西大学 社会安全研究センター 小澤 守

数年前、マイナンバー制が施行された。当初は戸籍管理のシステムと理解していたが、ここへきて保険証、果ては運転免許証まで一括して扱おうという政策が進行しつつある。それにまつわるトラブルとして最近巷をにぎわせているのが自治体の管理する個人情報や保険証との紐づけ不良である。

我々は例えば基礎年金番号、保険証、おそらく戸籍などにも番号が付与されており、状況に応じてそれぞれを利用している。とはいえ、桁数があまりに大きいためにそらんじているはずもなく、必要な場合には取り出していちいち確認する以外にない。それがマイナンバーに一本化されれば、セキュリティ上の問題はひとまず置いておくとして、管理しやすく確かに便利なことこの上ない。しかしながらそう単純にはいかないようである。

現在では国民全体で保険証番号を有しているにも関わらず、保険組合や自治体ごとに歴史的経緯や管理方法が異なると聞く。そのために統合は容易ではなく思惑通りの運用は困難なようだ。したがって今の一本化施策は、まず番号を国民一人一人に振って、それに保険証など既存の番号を紐づけした形、つまり日本の健康保険制度の抜本的な変革をせずに、形式上コンピュータ上で一括管理ができるようにしたものにはすぎない。しかもその紐づけにあたっては、国民個々に役所に出向くなどして手続きをすることが求められ、不慣れた住民と作業に追われる職員とのやり取りで行わざるを得ない状況である。結果様々なトラブルが発生したのだろう。無理もない。政府としてはデジタル後進国の汚名返上とばかりにデジタル庁まで作ったが、本来ツールであるはずのデジタル化については、マイナンバーカード取得と紐づけそのものを目的として、その促進のために電子マネーをばらまくという、まるでイベントのように推し進めてきた感がある。果たしてそれは真っ当な政策と言えるのだろうか。紐づけしたからといって複雑な紐がなくなるわけではないだろうに。

一括管理と書いたが、筆者のように国共済、私学共済、そして国民健康保険など順々に渡り合ってきたものなどは、保険組織が変わるたびごとにマイナンバーとの紐づけをやり直す必要があるのではないか。そもそも紐づけなど必要ないシステムがなぜ構築できなかったのか、今からでも遅くないだろうにどのような政策をとれば国民にとってより利便性の高い方式に持ち込めるのか、どうも全く議論がなされていないように思う。

新しい制度を導入する際に最も重要なのは、スクラップ&ビルドではないか。スクラップを残したままで新しい制度を導入すれば混乱が生じるのはあたりまえである。新しい制度が定着するのにかなりの年限が必要なのも周知の事実である。そんなに急いで既存の保険証を無効にする必要があるのか、またマイナンバーに紐づけされた保険証を使えば医療の精度があがるという論理も筆者には理解不能である。

今更の感があるが、例えば次のようにすれば少なくとも保険証に関しては軟着陸させられたと考える。日本では国民等しく赤ん坊に至るまで何らかの健康保険にそれこそ紐づけられているわけで、その保険組合、自治体などのデータを

集積すれば、個人が対応しなくても自動的に組合名を冠した健康保険番号が集められる。そこで国民全体を通じての番号（自治体や組合などに依存しない番号）を割り当て、保険証を更新する際に従前の番号とともにICチップに統一した番号を記憶させる。これによって徐々にではあるが、従来通りの使い方でマイナンバー相当の番号が全国民に行き渡り、医療機関などが順次ICチップ読み取り機を整備する中で、数年かけてその番号へ切り替わっていくことだろう。保険証より使用頻度が格段に低い自治体管理の戸籍データなどは、書類交付の申請のたびごとに保険証の提示を求め、データを読み取ればよい。もちろん政府が望むように今日明日に全国民一貫した番号を使えるようになるわけではない。しかし保険証など正しく使えてあたりまえなのだから、トラブルを極力減らすことは大命題のはず。昔から、急がば回れというではないか。

一部の人達を置き去りにしたような政策や、予算消化のためのバラマキといった間に合わせの手段ではなく、真に国民の役に立つ政策を考えること、その実現をめざして構築と見直し・再構築を繰り返して整備し、促進することこそ政府や国会の役割であろう。沢山の紐を正しい順で整然とつながないと電車ごっこもできないのだから。

